

# かさおか

発行所  
天理教笠岡大教会

かさおか編集掛  
笠岡市用之江377  
郵便番号714-0066  
(0865)  
電話 66-1311  
FAX 66-1314

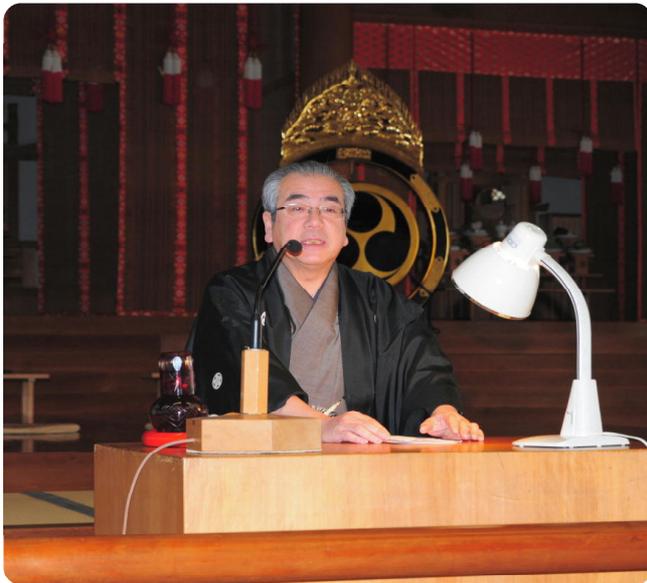


真実のおたすけ箱  
人のたすかりを願う真実の思いを教祖に届けよう

教祖130年祭に向かって

三年千日 さあ！ おたすけ  
祈る 動く つなぐ

立教176年  
1月号



「心定め」について話される大教会長様

年頭会議におけるお話し

どういっつもりで

## 『心定め』を出すのか？

大教会長様

要旨は次の通り。

立教176年大教会年頭会議は、1月20日午後2時から大教会参拝場で行われ、役員・部内教会長・布教所長らが参集した。先ず1月4日、本部会議所における真柱様の年頭あいさつを拝聴、引き続き、大教会長様は、年頭のごあいさつに当たり、単なる「立教176年の年

頭会議」ということではなくて、「三年千日歩み出しの年の年頭会議」として、三年千日を通る上で大切な事柄として「心定め」についてお話しくださいました。その後、講堂で会食がもたれた。あいさつの

年が改まり、いよいよ教祖130年祭に向かつての三年千日と仕切つての全教挙げての成人の歩みが始まりました。そういうことで、今日は、年祭のための年頭会議と位置づけ、3年間通る上で大切な「心定め」についてお話ししたい。

### ▼「心定め」といえば

さあくく月日がありてこの世界あり、世界ありてそれくあり、それくありて身の内あり、身の内ありて律あり、律ありても心定めが第一やで。  
(明20・1・13)

というお言葉が思い出されますが、

親神が先ず坐して、この世界が生れたのである。世界が生れてから、そこに国々があり、その中に人々が居り、その人々が身体を借りて居る。その人間が、住み易いように申し合

わせて作ったのが法律である。いかに法律が出来ても、それを活用するか否かは、人の心にある。即ち、一番大切なのは心である。この順序を知ったならば、確りと親神の話を聞いて、真心、即ち親神に通じる真の心を定める事が何よりも大切である(教祖伝第十章)と、「心定め」の意味が書いてあります。

### ▼毎年、出している『心定め』とは何なのか？

毎年、それぞれの教会ごとに「初席者何名、おさづけ拝戴者何名：…」という形で『心定め』を出してもらい、それをまとめ、大教会として心を定めて、真柱様に提出しております。

本年の『心定め』は、皆様方から出してもらったまま、初席者24名、おさづけ拝戴者183名、修養科修了者133名、教人登録者110名の心定めをしました。

『心定め』とは別に、春季大祭のときに、真柱様には、『前年の成果』を報告しております。

悲しいかな、人づくりの方は、思うように伸びていないと申しますか、『心定め』よりは大部分少ない。

そうすると、「心定め」ということの意味が、どこか徹底されていないように思えます。

「出せというから出しているのです、できるかできないかは関係ない」とか「いくら出せと言って

も、出してくれないので、上級の方で書いて出している」というようなところもあるようです。

そういうことを聞くと、何のために『心定め』を出しているのか、「心定め」の意味が全く分かっていないのかなとも思います。

そういう上から、今日は、「心定め」ということはどういうことなのかを勉強することも必要かと思ひまして、お話ししているところです。

### ▼たすけたい一心からの「心定め」

「心定めが第一やで」というお言葉をいただいた、その元はどこにあるかと申せば、教祖の御身が迫ってきたときに、教祖にたすかっていただきました。上から、親神様にお願いをされた。そうしたところ「つとめせよ」と言われ、「こういう理由でつとめはできません」とお答えすると、つとめをする上では「心定めが第一やで」と仰せられた。つまり、教祖の御身を氣遣う上から、たすかっていただきたい一心でお願いしたところ、心定めをせよと仰った。

つまり、「心定め」というものは、たすけたい一心の上からするのであって、しなければならぬいからするものではありません。

そこをしつかり思索しなければなりません。

たすけの道具立てとして、つとめときづけを急

き込まれた。一人でも多くの人をたすけたい、たすかってもらいたい、人だすけの心を使ってもらうための道具立てとしてつとめときづけを教えられた。それにつけても「心定めが第一やで」。

つまり、「心定め」とは、人さんにたすかってもらうためにするのであって、決して、自分のためでも、数合わせをするためのものでもないという事です。

つまり、心定めができないということは、言わば、人をたすける心にならないということにもならないかということ事です。

### ▼「価を以て実を買う」のが「心定め」

「心定めが第一やで」と仰せられたので、「さあ」という差迫った時には、我々の心通り確りと踏ん張って下さいませうか」と念を押されたところ、

さあく／＼実があれば実がある。実と言え

ば知るまい。真実というは火、水、風。

さあく／＼実を買うのやで。価を以て実を買

うのやで。(明20・1・13)

人に真実の心があれば、親神の真実の守護がある。いよく／＼という時は、親神が引き受ける。この世界の火、水、風は皆、親神の心のまゝに司る処である。

真実を以て買うならば、真実の守護を見せてやろう、親神の自由自在の守護を頂くには、

皆々が真心の限りを尽して事に当るのが肝腎である  
(教祖伝第十章)

と、教えられました。

正しく、『心定め』は「人づくり・御供」とは、一人ひとりの真実を出す行ないであって、その真実を出すことによって、親神様が自由に働いてやろうと仰せくださいます。

たすかってもらいたい、御守護いただきたいと願う、その真実こそが「心定め」であり、その「心定め」を実行することが、親神様の御守護を頂戴できる道筋であるということに他なりません。

重ねて申しますが、「心定め」は人さんにたすかってもらうためのものです。自分のためでも、自己満足のためでもない、言われたから仕方なくするものでもないということ事です。

「心定め」は、

さあく／＼実を買うのやで。価を以て実を買

うのやで。(明20・1・13)

これを具体的に現したのが「心定め」であるということを、改めて、心においてもらいたいと思ひます。

### ▼たすかってもらうには「心定めが第一や」

人にたすかってもらいたいと思うなら、本人の心定めもさることながら、願う者の心定めも重要

になつてきます。

たすかつてもらう人にも心定めをお願いし、そして、たすける私たちも自分自身の心定めをして、そして願う。

そうしたところ、真実をお受け取りいただき、自由の御守護を頂戴しておたすけいいただくということになつてくるのです。

たすかつてもらう、御守護いただくためには、「心定め」が必要だということです。

人さんにたすかつてもらうためには「心定めが第一や」ということを、改めて、この旬に、考えたい。

### ▼「心定め」は、御守護いただく理づくり

たすかつてもらう理立て

真実と受け取つていただく物種

その「心定め」ができないということは人をたすける心がないのか、御守護がほしくないのか、何のために信仰をしているのか、ということになる。

おちばから心定めを出せと言われたから出すのではありません。おちばから出せと言つてくださるのは、一人でも多くの人になすかつてもらいたいからであつて、言われたからするとかいう問題ではありません。

この人にたすかつてもらいたいという一つの心

定めとして、おちばがえりしてもらい、初席を運んでもらう。

それも、たすける真実という心定めであり、御守護いただく理づくりになつてくるということです。

だから、この人と神様との一対一だけの心定めではありません。

この人にもあの人にもたすかつてもらいたいから、別のもう一人、別席・おちばがえりに誘う。

この人にたすかつてもらいたいと思つたら、この人には別席を運んでもらおう、おさづけを頂戴してもらおうと思ひますが、他の人に声掛けすることも、一つには心定めであり、たすかつてもらうことの理立てであり、真実と受け取つていただく物種です。「心定め」がいかに大事かということとです。

人にご守護を頂戴してもらうために、おちばがえりしてもらう、初席を運んでもらう…、それでご守護を頂戴してもらいたい、その思いからさせてもらうのが「心定め」です。

ですから、「初席者1人」心定めしたから、1人の人だけをおたすけすればよいか、「初席者1名」できたから今年は何もしなくてもよいという事ではないということとです。

2名でも3名でも…、「心定め」以上ご守護い

ただくことは何も問題ありません。それは、心定めをお受け取りいただき、1名のところ2名になつたり3名になつたりと、さらに自由のご守護を頂戴した姿ではないでしょうか。

### ▼年祭に向けての笠岡の「心定め」

教祖130年祭には、10年前と同じように、笠岡として年祭の理立てをしたい。

教祖120年祭のときには、年ごとの『心定め』とは別に、年祭としての御供を申し合わせ、皆様方の真実でもつて、そのままの額をつとめさせていただきますました。

今度の教祖130年祭に対しては、笠岡の年祭御供として、10年前の半分の額で心定めしました。

これは、むしろ、人づくりの方にもつと力を入れてほしいからそうしましたので、人づくりの方に、しっかりと力を入れてつとめてもらいたい。冒頭で申した『心定め』の数は、1年目の『心定め』です。

さあ、これからの3年、これを基準として、とにかく、1名でも、2名でも、毎年、『心定め』の数が増えるようにさせてもらいたい。

そして、確実に増やしていくためには、単なる数合わせではなく、この『心定め』を「実数」にしたい。

つまり、本年、笠岡として、初席者247名以上、

おさづけ拝戴者183名以上……という数字——これを、「実数」にしよう。

それをもつて、来年の『心定め』を、これよりも1名でも、2名でも増やしていこう。

そしてまた2年目も実数にし、そして3年目は、3年目として、また、『心定め』の数を増やして、また、実数にして、教祖に「ああ、よう、この3年、人だすけの上に頑張ってくれたなあ」とお褒めいただけるような、お喜びいただけるような、この三年千日の歩みにしたい。

年ごとの御供の方も、年ごとに増えるような歩み方をしたい。

そういう上から、心を定めていくのだということとを、改めて、皆様方には、しっかりと心においていただいて、この心定めの大さき、そして、この心定めは、飽くまで、人さんにたすかつてもらいたいという止むに止まれぬ思いの上からさせていただくのが「心定め」である、人だすけのため的心定めである。つまり、心を定めた以上は、人だすけに歩む、そのことが大切だということを、年頭に当たって、今日は、申して、この三年千日、心を違えることなく、心を一つに揃えて、共に手を携えて、解らぬところはお互いに補い合いながら、勇んでつとめさせていただきたい。

### 《以上要約》

## 春季大祭講話

# 「世界一れつをたすけたい」

# をやの心に近づこう

## 大教会長様

立教176年大教会春季大祭は1月21日、大教会長様祭主のもと役員・部内教会長・布教所長・よふぼく・信者ら多数の参拝のもと執り行われた。大教会長様は神殿講話で、春季大祭の元一日に思いを寄せ、教祖が現身をお隠しになられたをやの思いと、その親心に報いる歩み方について話された。要旨は次の通り。

「さあ！おたすけ」

これが、教祖130年祭に向かって三年千日と仕切って、心の角目として、心において御用をつとめる上での心遣いです。

明治20年陰暦正月26日、教祖が、一れつこども成人を促す上から御身をお隠しなされた。

その「成人」とは、私たちの「心の成人」であり、その「心の成人」とは、一体、どういうことなのか、今日は、改めて思案したい。

その上で、「さあ！おたすけ」、このことについて、少しお話したい。

## ▼春季大祭の元一日

「つとめせよ」との仰せに、当時の方々はなかなかおつとめをつとめることができなかった。それは、おつとめをつとめると、教祖が警察に拘引され、何日も拘留されるか

らで、教祖にご苦勞をお掛けし、教祖に申し訳ないというような思いがあったからでした。

ところが、だんだんと教祖ご自身の御身が迫ってきましたので、教祖によくなっていたきたい上から、いよいよおつとめをつとめる決心が付き、拘引を覚悟の上で、重ね着をしておつとめをつとめられました。

当時、かんろだいは屋外にありましたので、おつとめは、底冷えのする極寒の中でつとめられました。

重ね着をされたのは寒いからではなくて、拘留された場合に備えてではありましたが、今日、多量なり暖房の効いた場所でおつとめできる私たちは、本当にありがたいことだと思えますが、それ以上に、この春季大祭は、当時の先生方の思いをしっかりと思案してつとめなければならないと思います。

さて、そうして、おつとめをつとめたところ、

教祖は、午後二時頃つとめの了ると共に、眠るが如く現身をおかくしになった。時に、御年九十歳。

人々は、全く、立つて居る大地が碎け、日月の光が消えて、この世が真つ暗になったように感じた。真実の親、長年の間、何ものにも替え難く慕い懐しんで来た教祖に別れて、身も心も消え失せんばかりに泣き悲しんだ。更に又、常々、百十五歳定命と教えられ、余人はいざ知らず、教祖は必ず百十五歳までお居で下さるものと、自らも信じ、人にも語つて来たのみならず、今日は、こうしておつとめをさして頂いたのであるから、必ずや御守護を頂けるに違いないと、勇み切つて居ただけに、全く驚愕し落胆した。人々は、皆うなだれて物を言う気力もなく、ひたすらに泣き悲しんで居たが、これではならじと気を取り直し、内蔵の二階で、飯降伊蔵を通してお指図を願うと、

さあく／＼ろつくの地にする。皆々揃うたかく。よう聞き分け。これまでに言うた事、実の箱へ入れて置いたが、神が扉開いて出たから、子供可愛い故、をやの命を二十五年先の命を縮めて、今からたすけするのやで。しっかり見て居よ。今までとこれから先としつかり見て居よ。扉開いてろつくの地にしようか、

扉閉めてろつくの地に。扉開いて、ろつくの地にしてくれ、と、言うたやないか。思うようにしてやった。さあ、これまで子供にやりたいものもあつた。なれども、ようやらなんだ。又々これから先だん／＼に理が渡そう。よう聞いて置け。

このお諭しを聞いて、一同は、アツと思つた。が、昨日答えた言葉を、今日言い直す事は出来ぬ。昨日お答え申上げた時の一同の心からすれば、姿をかくされようとは、全く思いもかけない事であつた。しかしながら、姿をかくして後までも、生きて働かれると聞き、成程、左様であるか、教祖は、姿をかくして後までも、一列たすけのために、存命のまゝお働き下さるのか、それならば、と、一同の人々は漸く安堵の胸を撫で下ろした。

(教祖伝第十章)

さあく／＼これまで住んで居る。何処へも行ってはせんで、何処へも行ってはせんで、日々の道を見て思やんしてくれねばならん。

(明23・3・17)

というお言葉をくださったわけです。

▼世界一れつをたすけるために現身を隠された  
 ・・・・一人ひとりのたすけ心の涵養と実践  
 亡くなったのではなくて、姿を隠しただけで、

「何処へも行ってはせんで」、今まで同様に世界だすけの上に働いていくとお聞かせいたたくと同時に、今までは、限られた人にしか渡すことのできなかつたおさづけを、「これから先だん／＼に理が渡そう」と仰せられた。

「世界一れつをたすけるために天降つた」という天保9年の本旨を、より実現するために、御身をお隠しくださいました。そのために、つとめを急ぎ込まれ、さづけを私たちに授けてくださるようになったということです。

それまでは、教祖御身でもつて、をびやだすけから始まつて、不思議なたすけを次々と現わされ、たすけ一条の上に歩んでくださった。

しかし、それではなかなか、世界だすけにはなつていかない。教祖御自らおたすけをされることにも限界もありました。親神様から一方的に私たちがたすけられたのでは、本当の陽氣ぐらしに立て替えていく道筋にはならない。

本当の陽氣ぐらしに立て替えていくためには、一れつの人間が、お互いにたすけ合い、勇まし合つていくところに、陽氣ぐらしの姿があるのです。

むしろ、教祖が御身を隠されることによつて、私たち一人ひとりが、人をたすける心になり、たすけ合いの理をこの世に現わすことによつて、陽氣ぐらしの世界が生まれてくるということを教えるためにも、御身を隠されたのではないかと思ひ

ます。

たすける人とたすけられる人を作るのではなく、世界中の人間、一人ひとりが、たすけ心を持ってたすけ合う姿を作りあげるところに、陽気ぐらゐの世界があるということ、御身をお隠しくだされることによってお示しいただいた姿でした。

この明治20年の親神様・教祖の思いは、一人ひとりがおたすけ人になってくれよ、といつても一人では、おたすけするのは難しいかろう、さあ、たすけの元立てであるつとめを、先ず、しっかりとつとめる、そのことによって、親神様が十分に働いてくださる。

そして、それと同時に、一人ひとりのたすけ心に乗って、教祖が直々に、たすけ一条の上に働いてやろう、さあその上にもさづけも必要であろうという上からさづけをくださるようになった。

そのをやの思いは、一人ひとりのたすけ心の涵養と実践であつたと思います。

### ▼存命の理を以て、今も変わることなく…

実際、今までと変わらず存命でいるといわれても、心から信じ切っておられたでしょうか？ 半信半疑というところだつたのではないかと思いません。

しかし、教祖がこうしてさづけもくださり、一人ひとりが人だすけの道を歩むことが大切だとい

うならよしやつてみよう、半信半疑のままに、それぞれに一生懸命、にをいがけ・おたすけに取れ、存命の理がなるほど心に収まったのではないかと思ひます。

そうして、教祖が御身をお隠しなされた後、療原に火を放つがごとく、たすけ一条の道が日本中に広がっていきました。その後、世界にも広がっていつて、今日の姿があります。

つまり、教祖は、亡くなられたのではなく、正しく姿を隠して、私たちよふぼくの心に乗って、自由に働いてくださつて、世界だすけの上に今もなお、働いてくださつていふことですから、お互いにしっかりとたすけ一条の上に歩ませてください。

### ▼教祖のひながたを通るための三年千日

教祖年祭に向かつての三年千日は、教祖のひながたを通るための三年千日です。

教祖のひながたは、正しく、人だすけのこれつこどもだすけのひながたであつた。とするなら、私たちよふぼく・信者は、この三年間を仕切つて、何でもどうでも、にをいがけ・おたすけの上に歩むことが大切である。それが、年祭に向けての成人の歩みであるということです。

教祖が御身を隠されて、私たち一人ひとりの成

人を急ぎ込まれると同時に、私たちの人だすけを通して、今度は、人だすけをできる人に育てていくということが、成人の歩みの一つではないかと思ひます。

### ▼「成人」とは

さて、「成人」とは「人に成る」と書きますが、これは、一般的な意味とは違つて、お道の上からすれば、正しく「親の心に成る」ということです。そして、「成人の道」とは、「親の心に近づくための歩み」であるということです。

親の心は、日々たすけたい、その心に近づく道ですから、つまり、人をたすける心になつたかどうか。

この三年千日は、「世界一れつをたすけたい」という心に近づくための歩みですから、今、たすける心がないからおたすけしない、少しでも人をたすける心になつたからおたすけするといふのではなく、たすける心がないからこそ、人をたすける心を、人にたすかつてもらいたいという心を、日々の中で少しずつでも使うことによつて、この三年間で、何でもどうでもたすかつてもらいたいという心にまで近づく、そういう心の成人をするための成人の歩みであるということです。

ですから、「さあ！おたすけ」というのは、立派なおたすけをせよということではありません。

飽くまで、この三年掛けて、よふぼくらしいよふぼくになるためですから、今は、わずかなことしかできなくても、1年目はできることから、2年目は少しできるようなったらもう少し、3年目はもう少しできるようになったらもう少し頑張ってみようか、と三年掛けてだんだんと「世界一れつをたすけたい」という心に、いかに近づくかということが大切だということを心においていたかった。

心ができたから歩むのではなくて、その心にならせてもらうために歩むのが三年千日の歩みであるということですよ。

それが、教祖年祭を仕切って歩む成人の歩みです。

#### ▼「さあ！おたすけ」

笠岡としては、「さあ！おたすけ」とスローガンを掲げて歩んでいます。実践項目として「祈る動くつなぐ」ということを掲げ、その上に「成人目標」を掲げて皆様方のお手許に届けています。掲げられた項目を全部しなさいということではありません。その一つひとつを確認しながら、これもおたすけになるということを、先ず知ってほしい。

これも、人のために心を尽くす、おたすけの心に繋がる心遣いだということを、先ず皆様方に

知ってもらいたい。

日々の中でおたすけ心を遣うということはどういうことかということをおたすけを先ず知ってもらう、これが1年目の成人の歩みだろうと思います。

しっかりと、その旨を理解してもらって、つとめていただきたい。

2年目はもう少し成人した姿を、3年目もさらに成人した姿を項目に掲げて知っていただいで、そして、その一つひとつをチェックしながら、そして、自分の心の姿を、皆が「世界一れつをたすけたい」というをやの心に少しでも近づかせてもらえればありがたいと思います。

改めて、人をたすける歩みの大切さ、しっかりと心におかせていただきたいと思えます。

#### ▼たすかるのは誰か

私は、今、毎日、おさづけをお取り次ぎしていきます。

1回のおさづけではなくて、最初は1日1回だったものを、今は、1日2回、朝夕のおつとめの後にお取り次ぎする。三日三夜仕切ってください、なかなか徴を見せていただけない、追い願いで三日三夜つとめる。

少し良くなったと思っても、すつきりとはご守護いただけないので、追い願ひ追い願ひで、毎日、お取り次ぎしている。

そうしてお願いしていると、自分自身の心の動きがだんだんと分かってきます。

最初は、何とかたすかかってもらいたいとお取り次ぎします。そうすると、当然、お話しもしなければならぬし、相手の思いも聞かなければならない。

そうしておたすけに掛かると、だんだん、相手の心が見えてくるので、それについてのお話しもする。こうしたらどうか、こういう心遣いをしたらどうか、というような話しをする。

そうすると、少し良くなったと思っても、なかなかご守護いただけないので、この人は、私の言うことが分かっているのか、あなたの心さえ変われば身上はよくなるのか、というような、相手を責めるようなおさづけになってしまう。

なかなかご守護いただけぬ、何故だろうということになる、今度は、相手ではなくて、自分と神様との話しになってきます。

そういうことに気が付くと、申し訳なかった、こちらの心の成人が足らなかつたばかりに、自分の心のこういうところが足らなかつた気が付きます。

ああ申し訳なかった、相手を責めていたが違つ、それこそ、鏡、こちらの心通りに相手に映つてきたのだと、自分がしっかりと心定めして、心を改め反省して、おさづけを取り次ぐようになりました。

そうするとおさづけを取り次ぐ心が変わってききました。それまでは、何とか何とかと神様のご守護を願うばかりでしたが、自分の心を反省しておさづけを取り次ぐようと思ったときに、自分が幼いときに母親に取り次いでもらったおさづけを思い出しました。

あのときのおさづけは、何とも言えない暖かい慈愛の籠もったおさづけだったなあ、そんなおさづけをお取り次ぎできればありがたいなあ、と思つてからは、母親に取り次いでもらったあの感動の心で、正しく親心というのでしょうか、その心を思い起こしてお取り次ぎできるようになりました。

まだまだ、すっきりとはご守護いただけていませんが、おたすけをすることによって、相手の身上が良くなることもさることながら、自分自身の心が澄まされると感じたときに、正しくこれがおたすけの効能なんだなと思いました。

「人をたすけて我が身たすかる」と仰せいただきますが、正しく、人をたすける心を遣うことによつて、最初は、教義に照らして相手を責めていた気持ちだが、だんだんと、自分の心が洗われていくことに気付いて、これが、本当のおたすけの姿だと、これを親神様・教祖が求めておられるんだな、だからこそ、御身をもつてたすけをするよりも、一人ひとりのたすけ心を使うことの大切さと

いうものを急かしたんだなと思いました。おたすけは、相手に対するおたすけだけではなく、そのおたすけの心遣い・行為によつて、正しく、自分自身の心がたすかかっていく、陽気ぐらしの心に近づくものなんだなということに味わった次第です。

### ▼いんねんを切る人だすけの道

をやの思ひは、一人ひとりの心のそうじです。心のそうじは、人をたすけるという心遣い、人をたすける行ないによつてこそ、人をたすける心が生まれてくるということです。

私たちは、たすけていただいた御恩報じということで、おちびがえりし、別席を運び、ひのきしんをする、そして、御供をしています。

しかし、一番お喜びいただく御恩報じは人だすけです。それは、人をたすけたらその人の心がたすかるからです。

そうして、「人だすけ」という御恩報じの道を歩むことによつて、御恩報じの心も、もう一つ成人して、心からああ本当にありがたいなと喜べるようになってきます。

改めて、この三年千日、本当の心のたすかり、本当に陽気ぐらしの道に切り替わるたすかり、そして、いんねんを切らせてもらうたすかりは、人だすけにこそあると思います。

三年千日、仕切つて、いんねんを切らせていただけの人だすけの道、人だすけの苦勞、共々に味わつて、三年後、「三年千日、長い間、ようつとめてくれたな」と、教祖にお喜びいただける、またお褒めいただける歩みにしたいと思うところです。

共々に勇んでつとめましょう。どうぞ、よろしくお願いいたします。

「さあ！おたすけ」

《以上要約》

## 温故知新

### いきいきエピソード 21

#### 四代会長様の初代の思い出

私が会長になりました。教祖七十年祭の前に、全部内の教会長を集めて、今は亡き二代真柱様から親しく年祭に対する心構えについてお話し頂いたのでありますが、その時私は初めて聴かせて頂いたのでありますが、初代真柱様のお手帳の中に、教祖一年祭に帰られたその当時の講元の名前が書かれていて、それを二代真柱様が挙げられました。その中に初代様の名前が入っておつ

たのであります。順次講元の名を読み挙げられまして、その中に備中真明組講元・上原さとの名前を述べられたのであります。それほど初代は教祖というまた道という上について、女の身でありながら、しかもおぢばから遠い笠岡の地にありながら、教祖の年祭にお帰り頂いておる、こういう尊い理をお造り戴いている私達の初代であるという事を私は初めて知ったのであります。今まで老会長様も又初代様その方も何も私達に仰って頂いておりません。その時にこれほどの理を私達に遺してくれている初代、その初代のおぢばへの思いを受けて、教祖の年祭にどんな中も厭わずおぢばへ帰った初代の心を心として通らせて頂きたいと、今日も歩ませて頂いている私であります。

想い出であります。初代が出直しましたのは、私が天理外国語学校卒業の三年目の年でありました。私が福山の誠之館中学を卒業致します昭和十五年正月の三日に、当時中国大陸北支で前線におりました長兄の戦死の公報が参りました。それまでに小さい頃から、曾ばあちゃん、曾ばあちゃんと言つて傍に行つて菓子をもらうのが楽しみでありました。そうすると、巾着を沢山縫つて拵えておられまして、私が「曾ばあちゃん、これがないすね」と言いますと、初代は「ここへ帰つて来た人いろいろな物を入れ

て上げるねん。こうして引つ張ると口が閉まるやろ。中に入れた物が落ちへん。」と説明してくれたりしました。

長男が戦死して後はいろんな話を聴かせてくれたりしました。

それで、出直しの時の事に話は戻りますが、当時は短縮授業で、詰所から学校に出ようとしたとき履いていた鼻緒が切れまして、それですぐ大教会に問い合わせましたら、旧長さんが今亡くなられた、との事でありました。すぐ帰らせて貰おうかと言いましたら、あんたは学校がもう卒業間近だから、帰らんでよろしいという事で、葬式にも会えずになつてしまつた訳です。

私が小学校三年くらいのことだつたと思いましたが、今ちよつと高田の千鶴ちゃんから話ができましたが、その当時、藤井の喜代治さん、川合一さん、神邊に養子に來られていた方、今ちよつと名前が出てきませんが、そういう方が集まつて、初代はもう当時八十歳近かつたと思ひます、なんかの楽しみにと皆が寄つて初代にマーシャンを教えておられたのであります。それを私は小学校二、三年頃に傍におつて見させてもらつておりました。最初私は何にも分からなくて鳥のようなのが何羽いるとか、丸書いたのが幾つあるとか言つてよく叱られたもんです。だんだん私もそういう事からマーシャンが分かるよう

になつて、まあ後には初代さんの相手もさせていただけようになりました。傍で見つておりました藤井寛水さんが横の方から私に旧長さんの手の内に「東」という字が幾つある? とそつと聴くんですネ。「一つある」と言いますと、「それを捨てなさいと言え」というんです。初代は私より近視がきつかつた。それで眼鏡をかけて配牌を整理しておられるのを見ておりますと「東」はたとえ一枚しかなくとも、端の方において河に流そうとされぬ。南北西とあります、そういう牌はどんな切られる。それでは、東が一枚だけですから、上がれませんかよと言つても、「かまわへんネ」。どうして二枚、三枚ある南や西を切つて一枚しかない東を手の内に残されるんですか、と聴くと「お前らにはわからへんネ」と言われる。私もだんだん年がいつて、その点の理解がいくつになつたんです。初代は伊賀上野の川合家の出であります。明治のあの当時、大阪に出て上原佐吉が身元引受となつて折井という金具屋に勤めておつた。折井の家の一人息子が大病となり医者が見込んでご守りしたのを、初代は一週間の裸足参りでご守護頂いた。その信心を見込んで佐吉さんは初代をすぐに上原家に引き取つて豊表の商売をしておつた上原家の娘分とされたのであります。程なくして、佐吉さんの甥である笠原佐助さんが

笠岡から上原家に手伝いに来た。そして初代と佐助さんは結婚して上原家を継ぐのですが、明治十三年、商売が左まえになる中、縁あって道の話をお聞き入信しました。上原家は東京との取引が多かったものですから、佐吉さんの意向で、東京の商売相手、碇清水と言いますが、その掛けをとってこつちに送ってくれと言う事で佐助さんは東京に行かれた。親神様の思召でしようか、東京で佐助さんは腹部が真っ赤になつて大きな腫れ物ができるといふ身上になられた。その腫れ物の頭に佐助さんはお息の紙を貼つて銭湯に行かれた。ご存じのように腫れ物でき物は湯が一番悪い。それを風呂屋の板場で見た浴客の一人が、そんな腫れ物風呂に入れてよいのかね、見れば小さい紙が貼つてあるようだがそれは何のおまじないか。これは有り難い神様のお紙で、これさえ貼つてあれば大丈夫だ。それじゃうちの子供が家内の乳首に噛みついて困つておりますが、それで治りましょうか。そんな事は何でもない。これを分けて上げるから乳首に貼つておきなさい。佐助さんはそう言つてお息の紙を渡した。すると間もなく子供が乳首を噛まなくなつて疵もご守護頂いた、という事でこれが東大教会の元一日であります。

一方大阪の方では、いくら待つても東京からお金は送つて来ない、佐吉の方が音を上げて笠

岡へ帰つて来た。そしてそれを追うように佐吉の意向を受けて初代も笠岡へ帰つて来た。後、初代は布教に歩くようになって笠岡の礎を造つてくれる訳であります。明治二十年頃、未ださと・佐助(結婚後、トヨの名前をさとと改名)は夫婦でありましたので、佐助さんが東京に出てきたらと言つたのであります。初代は、私は親をおいて出てゆく訳には参りません。もしそちらで良い人があつたらと申し送つております。ですから笠岡大教会の墓地には上原家創設の祖である佐吉・八重の墓があります。東京は佐助さんからあります。

話が長くなりましたが、私がマージャンさんである傍でいろいろ言つておりました中に、「お前らに分かつたもんじゃない」と言われたその言葉の中に、心ならずも道のため、親のために、普通世間で言えば、夫婦は二世、親子は三世との言葉がありますが、それほど濃い夫婦の繋がりを断ち切つてまでも、親即ちお道の上に伏せ込まれた、厳しいいわゆる理に立ちきつた初代様であつたのではありますけれども、そこにやはり夫婦の愛情というものが、思わず知らず心の中に残つておつたのではないかと思わせて頂くのであります。ですから父親を送つてその後、笠岡の初代となられた方でありませうけれども、皆様方が勧めて下さつたマージャンの中に「東

という字がある。そこに「あずま」という主人といううえに女としての断ち切れない思いが初代様の心の中に残つておつたのじゃないかという思いが、私がいろいろな人生経験を積み大きくになりました現在、しみじみと考えさせて頂くのであります。だから、子供の頃傍で見つておつて、おばあさん、そんな一枚しかないのにあがれませんよと言つと、「あがれんでもええんじや、お前らにはわからへん」と言われた言葉に生き別れとなつた主人への懐かしい思いというものがあつたんではなからうか、と思わせて頂きます。

今日(昭和四十七年十月二十日)初代様の三十年祭を迎えさせて頂きまして、私達はこの十月二十六日に教祖九十年祭へのお仕込みを頂くのではないかと思つてあります。大教会の完成致しました移転普請を転機としまして、また初代様のこの年祭を転機としまして、笠岡としてどうしても親孝心一筋に歩ませて頂きたい、そう思わせて頂きます。

以上、初代の三十年祭での締め括りとしての四代会長の想い出話である。昭和四十七年当時の録音テープが残つていたので、それをCDに再収録して文章にさせて頂いた。懐かしい人達の声が聞けて心豊かなテープほどの時を過ごさせて頂いた。

(前史料部長)

# よふぼく勉強会開催

テーマは「心定め」

春季大祭後

育成部(吉岡壽部長)では、1月21日、大教会春季大祭後、会議室で「よふぼく勉強会」を開催、11人が参加した。今回のテーマは「心定め」。講



「心定め」について熱弁される谷内先生

師は谷内伸自先生。

先生は、岐阜県に教会を置き、自教会での体験、教区の立場の上からの経験を通しての心定めについてお話しくださいました。谷内先生は、心定めはする前からできないというのではなく、一生懸命通らせて頂いた中で達成できないことは神様は受け取ってくださるが、大切な事はたすけ心を持って「はい」という気持ちで素直に受ける心が大切であると話された。

そして、教祖130年祭に向かう三年千日の心定めは、会長1人が定めるのではなく教会に繋がるよふぼく・信者、皆の定める心なので、皆が一手一つに勇んでご守護頂ける様、日々を大事に三年間をお通りください、と締めくくられた。

## 直轄委員部長研修会

開催

婦人会

2・3

大教会

婦人会笠岡支部(上原きよ紀支部長)は、2月3日、大教会で同支部委員、直轄委員部長を対象に、本年の初例会を兼ねた研修会を開催、35人が参加した。  
座りづとめをつとめた後、支部長様が、婦人会本部の活動方針である

「全婦人会委員はご恩報じの道を邁進しよう」について、会員一人一人がこれを目標にすることが大切とお話下さり、引き続き、大教会長様より「たすかる旬・たすけの旬」についてお話を頂戴した。

午後からは、大教会長様、支部長様のお話を受けて5班に分かれ練り合いをし、「ありがたいと思つたら言葉に出す」「まず、自分自身が教理をしつかり勉強する」など活発な意見が飛び交った。

各班で出た意見は、閉講式にて発表をし、参加者全員で分かち合えた。閉講あいさつとして、弥高山委員部長(岡崎豊子委員)が「教祖百三十年祭三年千日歩みだしの年として、教会の台として女性の徳分を活かして、ご恩報じの道を歩ませていただきますよう。」とあいさつをし、共に奮起を誓い閉講した。

## 談話室



「ありがとうございました」

海松ヶ岡分教会 池田 広子  
一月の春季大祭も、とどこおりなく済んで、直

会の時、とつてもビッグなサプライズがあった。会長様から「一月生まれの方いらっしやいますか? いらっしやったらお立ち下さい。」と言われ、私ともう一人の方が立つと、「お誕生日おめでとうございます」とうれしいおことば……。そこにいるみんなで、「ハッピーバースデー」の歌と手拍子に、びっくりするやらうれしいやら……。巡教でいらっしやった先生までも、手をたたいて歌って下さいました。お正月(一月一日)生まれの私は、今までこんなふうな誕生日を、祝ってもらったことがありません。これまでの誕生日は「日本中の人が、おめでとうと祝ってくれてよかったね。」で、すまされてきたような気がします。奥様のアイデアだと、後でわかりましたが、このサプライズはとつてもステキな事だと思います。私のように大喜びする人ばかりではないでしょうが、きつと心がほんわかと、あたたくくなるはずです。来月の誕生日は、どなたかしら? ……今から楽しみです。プレゼントのチュッパチャップスは、当分の間食せずに、残しておこうと思っています。教会のみなさま、本当にありがとうございます。これからも続けてほしいサプライズ行事だと思います。

こころの詩

▼養徳社発行『陽気』誌二月号、「道柳」より転載

▽今回の課題は「時」、笠岡に繋がる教友の方が選ばれ掲載されていますので転載させて頂きます。おめでとうございます。

準秀詠 東悠分教会前会長夫人 田林美智子さん

先人の往時を偲ぶ雪の道

▼表紙写真

(吉岡輝昭かさおか編集部員)

<少年会>

○かさおかむつみ鼓笛隊 春の合同合宿のお知らせ

- ・毎年恒例の笠岡全体合同合宿を、下記の通り大教会で開催いたします。
- ・今すでに鼓笛をしている皆さん、これから鼓笛をやりたいという人、みんなあつまれ～!
- ・少年会を卒業した人は係員をお願いします!

日 程 3月30日(土)～4月1日(月)  
新しい教祖130年祭の歌の練習

参加お供 1000円と米3合

※詳しくは各隊の責任者、又は海松ヶ岡会長(笠岡詰所)までお尋ね下さい。

○おつとめまなび総会

- ・教会おとまり会などで練習した成果を親神様・教祖にご覧いただきましょう。

日 時 4月1日(月) 受付8時45分 祭儀式9時30分

場 所 大教会

役割・祭儀式

祭主：福山、 扨者1：高屋、 扨者2：島根、  
 賛者1：東ブロック、 賛者2：西ブロック・府中市、 指図方：上下。  
 坐りづとめ・よろづよ八首：直轄教会  
 1・2下り目 : 高 屋  
 3・4下り目 : 西ブロック・府中市  
 5・6下り目 : 上 下  
 7・8下り目 : 島 根  
 9・10下り目 : 東ブロック  
 11・12下り目 : 福 山

- 内 容** 午前9時 おつとめまなび、式典、わかぎ門出式、教祖130年祭の歌演奏  
午後 模擬店
- 服 装** ハッピーと白靴下、祭儀式はおつとめ衣
- ※おつとめ役割は2月28日までに各ブロック少年会担当者に名簿を提出してください。  
(東ブロックのおつとめ役割は2月20日までに海松ヶ岡会長に提出して下さい)  
わかぎ門出式に出席される教会は名簿を3月21日迄に少年会に提出して下さい。

## <学生担当委員会>

### ○春の学生おぢばがえり(3月28日)案内

- ・3月28日は年に一度、全国から大勢の学生がおぢばに帰り集い、真柱様からお言葉を頂戴します。自らの考え方や行動が、天理教の教えに沿っているか確かめる大切な日です。
- ・一緒にお道を伝え、広げていく仲間と共に、陽気ぐらしへの新たな一步を踏み出します。

### 式 典

- 式典では、真柱様から、道の学生の指針となるお言葉を聞かせていただきます。また、世界たすけの「ようぼく」となるため、「道の学生成人目標」を誓い合います。
- 時間：9時～10時半(入場は8時～)
- 場所：本部神殿中庭

### 直属アワー・別席

- 直属アワーでは、同じ直属教会につながる学生が集い、大教会長様からお話を聞かせていただいたり、親睦行事を通して絆を深めます。
- 時間：式典後(11時頃)～15時
- 場所：笠岡詰所ほか

### 後 夜 祭

- 後夜祭では、迫力あるステージパフォーマンスや趣向を凝らした模擬店など、楽しい企画がいっぱいです。おぢばに帰り集った、道の学生の喜びと活気が会場全体に満ちあふれます。
- 時間：本部夕づとめ終了後から21時頃
- 場所：東西泉水プール前

※参加申し込みは、各教区・支部学生担当委員会まで

## <雅 楽 部>

### ○雅楽勉強会

— 各教会の月次祭に雅楽を奏でよう —

- 期 日** 3月24日(日)
- と ころ** 大教会
- 対 象** 初心者、初級者(少年会員、一般)
- 内 容** 初心者は、雅楽の基礎から勉強を、また、初級者は平調の越殿楽が合奏できるよう勉強します
- 講 師** 大教会雅楽奉仕者
- 参加費** 300円
- 申し込み** 3月20日までに大教会に申し込み
- ※楽器は各自持参ですが、都合がつかない人はご相談に応じます。

## 春季大祭祭文

これの笠岡大教会の神床にお鎮まり下さいます

親神天理王命の御前に 会長上原理一 慎んで申し上げます

親神様には 一列子供の陽気ぐらしを楽しみに泥海中より道具を引き寄せ 守護を教え八千八度の生まれ替わりを経て この世と人間をお創造つくくり下され心の自由のまに／＼御守護お育て下さっております 加えて約束の年限到来と共に教祖を月日の社とお定めになり 陽気ぐらしのひながたをお示し下され成人へとお導き下さいます事は誠に有難く勿体ない極みでございます

私共は身上事情を通して親心と御守護の有難さに気付かせて頂き 日々は御恩報じを思い念じて朝夕に御礼申し上げると共に つとめとさづけを通してにをいがおたすけにと道の御用の上に勤め励ませて頂いております

分けてもこの月二十六日は 教祖が一列子供の成人を急き込む上から御姿をお隠しになられ ろくちに踏み均しに出られた尊い日に当り おぢばでは春の大祭が執り行われますが 当笠岡に於きましてもその理にならい 只今からおつとめ奉仕人一同 明治二十年当時のつとめとさづけに込められた親の思いと命捨ててもと命掛けでつとめられた先人達のお心に思いを馳せ 勇んで坐りつとめてをどりをつとめて春の大祭を執り行わせて頂きます 御前には遠近や寒さも厭いませす 今日の日を大切と寄り集いました道の子供達が相共に声高らかにお歌を唱和し 同じ思いに伏し拝み 尚も変わらぬ親心にお継りする状を御覧下さいまして親神様にもお勇み下さいますようお願い申し上げます

さていよく 教祖百三十年祭に向け三年千日と仕切つての成人の歩みが始まりました 昨年の諭達巡教を受け 年が明け早速に今月 直轄教会に諭達巡教を実施させて頂きました 引き続き二月三月と部内への巡教 四月に掛けての追加巡教を実施させて頂き 諭達に込められた人の心が混沌としたこの時代だからこそ 年祭に向けよぶく信者一丸となって人助けに邁進する事の大切さを伝え 加えて実動に移すべく「さあ！おたすけ」とのスローガンの基 「祈る・動く・つなぐ」の実践項目を通して 三年間を通して共に手を携えてひながたを辿らせて頂いて おつとめ奉仕人を御守護頂く為の総仕上げとさせて頂く所存でございます

何卒親神様には 教祖の年祭に向けての皆の決意に込められた誠真実の心と日々の理作りに込められた真実をお受け取り下さいます 万たすけの上に親心一杯の自由の御守護を賜り 真実の親を知り一列兄弟の理に目覚めて 万互いに助け合い睦び合う陽気ぐらしの世の状に一日も早くお導き下さいますよう 一同と共に慎んでお願い申し上げます

立教百七十六年 春季大祭 祭典役割表

祭主	祭者	講話	役割		地方	おつとめ てをどり	笛	ちやんぽん	拍子木	太鼓	すりがね	小鼓	琴	三味線	胡弓
			区分	区分											
大教会長様	中村邦義	大教会長様	坐り勤	前	高木昭祥	岡本久善	岡崎真一	西江昌直	河原節喜	笹尾正治	杉原博之	武内清明	今川佐智子	虫明好美	上原順子
大教会長様	中村邦義	大教会長様	前	前	高木昭祥	岡本久善	岡崎真一	西江昌直	河原節喜	笹尾正治	杉原博之	武内清明	今川佐智子	森本富美子	岡崎豊子
大教会長様	中村邦義	大教会長様	後	後	高木昭祥	岡本久善	岡崎真一	西江昌直	河原節喜	笹尾正治	杉原博之	武内清明	今川佐智子	横山小智榮	高木孝子

指図方	岡本久善
賛者	三島道徳

三月講話  
学生層育成者講習会

※お詫びと訂正

本年1月21日発行の『かさおか 第52巻 第1号』11ページ「こころの詩」の記事中『陽気』誌七月号「課題は昇」は「一月号」課題は「動」の誤りでした。

また、13ページ「教会別人づくり一覽表」の記事中、川島郷分教会の「授訓1」が抜けておりました。読者の皆様ならびに関係者の皆様にご迷惑をお掛けしましたことをお詫びするとともに、ここに訂正させていただきます。

本部布教部福祉課酒害相談室は、昨年開設三十周年を迎え、それを機に岡山教区にも窓口を設置させて頂きました。

アルコール依存症は精神障害であり、内科医ではやつかいな病気として医者の手余りともされています。アルコール依存症に関わらず心の難渋をたすけるが台とお教え頂く私達用木は、昨年真柱様より諭達のご発布を頂き、たすけ心を持つ事の急務をお促し下されています。

酒害相談室では、今年よりアルコール問題をベースに自殺者を持つ

家族の心のケアや、うつ病の人への対応にも取り組む様にして、関わる人達に声をかけ一月二十五日午後一時より、教会系統超えてのおつとめまなびをつとめさせて頂きました。終了後には、一人ひとり現況報告と今抱える持つて行き場のない生活現状などを話し、少しでも心の負担が癒され、たすけ合える場になればと、親神様の人間始めかけた御心を胸にこの集まりを遊山会と名付け、今後末永く続く歩みの方向性を室長よりお話し頂きました。この活動を通して、計り知れない環境の中での生活や、身に覚えのない不条理な出来事に出会うという話しを聞かせ頂き、今の自分でできる事はその人の胸の内を聞いてあげる事しかできないと思ふし、いんねんの自覚は成つてくる事、見せられる事しか判断できないと分かつていても、その中で親心を悟り、今の自分に都合の良い結果を求めず、お教え頂くたんのうの心を定めて通る事がいかに難しく、大切であるかという場を与えて頂き、これからは皆の心に溶け込んでいける様心に誓い、二十六日の春の大祭を迎えさせて頂きました。(む)